

おばあちゃんの天気予報

原田康法

「今日は、雨がふるから、かさをもっておいき」

学校へ出かけようとする早苗に、おばあちゃんがありました。

「だって、小坂山があんなに近く見えるもの」

おばあちゃんは、いつもとなり町とのさかいにある小坂山をながめて、その日の天気を予想します。小坂山は、みかんの木がたくさんっている低い山ですが、おばあちゃんによれば、「小坂山が手にとどきそうに見えるときは、雨がふる」のだそうです。

「えっつ、やだよ。こんな晴れた日にかさをもっていくなんて、かっこ悪いよ」

早苗は、口をとがらせておばあちゃんに言いかえました。おばあちゃんの天気予報は、よくあたりますが、さすがに、今日は、まっ青な空に雲ひとつ浮かんでいません。それに、テレビに出てくる天気予報士のおねえさんは、一日じゅう、晴れだと言っていました。

早苗は、お母さんの作ってくれたおべんとうを手さげかばんに入れると、「いつてきまあす」元気に家を飛びだしたのでした。

さて、午前の授業がおわりお昼休みになると、いつの間にか、空が白くくもっていましたが。さつきまで、明るい太陽の日ざしが教室の中まで照りつけていたというのに、なんだか、あやしい空もようです。

「チーちゃん、今日、かさもってきた？」

早苗は、うしろの席にすわっているなかよしのチーちゃんにたずねました。

「ううん、もってきてないよ。お母さんが、雨のふる心配はないって」

「そうだよね。ふらないよね」

早苗は、すこしほっとしましたが、そんな話をしているうちにも、空は、どんどん暗くなっています。そして、しばらくすると、とうとう、大きな雨つぶがぼとりぼとりと落ちはじめました。

(あゝ、おばあちゃんの天気予報があたった・・・)

早苗は、うらめしそうに空を見上げましたが、今となっては、どうしようもありません。しかも、とつぜん、ピカッ！空に、いなずまが走りました。

「わあっ、嵐みたいになっちゃった」

早苗は、なさけない気もちで窓の外をながめました。けつきよく、カミナリは一度だけでおさまりましたが、雨は、いつまでたってもやみそうにありません。

放課後になると、お母さんが車でむかえにきてくれる女の子、かばんを頭にのせて、かえってはしゃいで雨の中へかけだしていく男の子など、だんだん、学校にのこっている子どもが少なくなっていました。

早苗は、チーちゃんとかつ箱の前に立って、とほうにくれていました。

「こまったなあ、チーちゃん、走って帰ろうか？」

「うん、でも、ずぶぬれになっちゃうね」

二人がため息をついたときでした。早苗の名前を呼ぶ、おばあちゃんの声がおもてから聞こえてきました。

「早苗、まったかい？」

「おばあちゃん！」

「ほれ、かさを持ってきてやったから、いっしょに帰ろ」

おばあちゃんは、茶色の自分のかさをさしながら、手に早苗の赤いかさをもっていました。でも、これでは、チーちゃんが帰れません。

「チーちゃん、わたしのかさをかしてあげるよ」

「ほんとに？でも、早苗ちゃんはどうするの？」

「だいじょうぶ、わたしは、おばあちゃんのかさにいっしょに入れてもらおうから」

早苗がそう言うと、おばあちゃんも、「そうだ、それがいい」と笑顔になりました。

チーちゃんとわかれてから、早苗はおばあちゃんにぴったりとよりそって学校を出ました。

おばあちゃんのかさは大きくて、こうしていれば、ぬれずにすみます。

「おばあちゃん、ごめんね。おばあちゃんの言うことを聞いていれば、こんなことにならなかったね」

早苗は、おばあちゃんにあやまりました。やっぱり、おばあちゃんの天気予報は最高です。

テレビよりも、新聞の天気予報よりも最高です。

けれども、おばあちゃんは、うれしそうに目を細めてこたえました。

「そうかねえ。わたしや、ひさしぶりに早苗とあいあいがさになれて、とってもうれしいよ」

早苗は、ほっぺたを赤くしました。ほんとうに、おばあちゃんの言うとおりで。おばあ

ちゃんとのあいあいがさがうれしいのは、早苗だっておなじです。

だいすきなおばあちゃん。いつまでも、ずっとずっと、元気でいてね。

雨が少しだけ、弱くなってきました。遠く東の雲のすき間に、うっすらと青空が見えています。明日は、きっと晴れるにちがいありません。